

引率者派遣報告書



ノックスビル市派遣報告書 ～研修のようすと成果・課題～

室蘭市立港北中学校教諭 鈴木克治

<出発準備 ～何刀流？大忙しの事前研修～>

室蘭市の姉妹都市であるアメリカのテネシー州ノックスビル市を訪れ、文化交流などを進めるノックスビル市派遣事業が今年の10月26日から11月2日に実施された。今年度は市内の中学生9名と引率2名が選ばれた。新型コロナウイルス感染症の影響で中止となっていたため、4年ぶりの事業の再開となった。

活動としては、10月26日の出発を目指し、9月と10月の毎週末、派遣生徒が集まり、事前の準備を行った。内容は、互いの自己紹介、リーダー・副リーダーの選出、個人の研修テーマの決定、ノックスビル市での歓迎式典で披露する出し物の決定と練習、スピーチの作成と練習、ホームステイ先での注意、持ち物や連絡方法のミーティング、日程のミーティング…多くの内容をわずかな時間で行わなければならなかった。

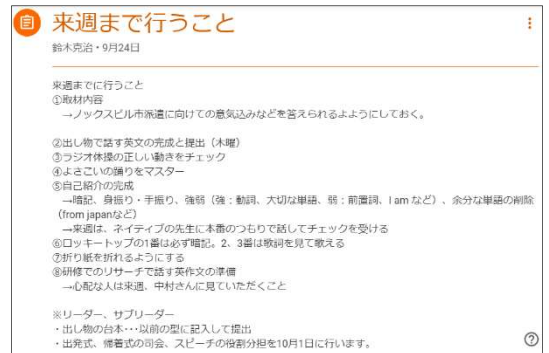
今年度は、各学校で使用されているパソコン端末を利用した。そのため、次の研修日までの課題の共有、提出した原稿の手直し、動画を共有した踊りの練習など、作業効率を上げることができた。

作業効率が上がったとはいえ、事前に行うべき内容は多岐にわたり、生徒たちは、勉強、生徒会活動、部活動や習い事、テスト勉強など大谷選手顔負けの「二刀流、三刀流」の状態であった。しかし、派遣生徒としての責任とノックスビル市への期待を胸に一生懸命に課題に取り組んだ。

こんながんばり屋の生徒たちも、事前研修で初めて顔を合わせたときは表情も硬く、緊張したようすだった。「これから頑張るぞー、おー」というかけ声も、引率者の声だけが部屋に響く寂しい状況であった。しかし、研修を重ねる度にそれぞれが持ち味を出し始め、活発な話し合いや練習が行われるようになっていった。

研修ではALTの先生方に、トイレの使い方、ドアの扱い、食べ物の量など、実際の生活に役立つ情報を教えていただいた。研修で最も時間を要したのが、ノックスビル市で行われる歓迎式典での出し物の練習である。英語での説明、実演、並び方、時間配分など取り組むべき内容が多く、みんな必死で練習した。

日本を立つ前に開催された出発式で、出し物を披露する機会があった。保護者のみなさん、校長先生、報道陣を前に緊張しながらも何とか練習の成果を発揮することができた。後はノックスビル市での本番を待つだけだ！



<10月26日 へいよいよ出発 旅は、学びの宝箱だへ>

出発の日、早朝から家族や市役所の担当の方々、校長先生が集まってくれました。みなさんに見送られ、バスで新千歳空港へ向かった。空港に着くと、乗り物に酔ってしまった生徒をみんなでサポートしながらチェックインカウンターへ。今回の研修では、乗り物酔いをする生徒が多く見られ、睡眠や乗車前の飲食、薬の準備など自分でコンディションを整える大切さを学ぶことができた。



手荷物カウンターで荷物を預ける前にちょっとした出来事が起こった。現在、機内に持ち込む液体(クリームや乳液など)の量は決められており、その液体の容器を蓋のついた袋に入れなければならない。事前に伝えていたのだが、持ち込み荷物に液体が無造作に入っている生徒が。みんなで荷物をチェックし直し、袋に入れ直したり、預け入れ荷物に入れ替えたりとてんやわんやの状態になった。事前の注意事項をよく理解しておかなければ、大切な時間が失われてしまうことになる。



何とか無事に荷物を預け、保安検査場へ移動。と、ここでも一騒動。保安検査場では、コートを脱ぎ、持ち物やポケットの中をトレーに出さなければならない。多くの生徒は大きな荷物を抱え、肩掛けバックを身につけ、パスポートとチケットを持ち…すべての物をトレーに置くまでに時間がかかる。後ろには一般のお客さんが列をなして待っている。焦れば焦るほど肩掛けバックのひもとコートが絡まり、身もだえする場面も…網に掛かった魚のようになっていた。荷物から電子機器の取り出し忘れや飲み物の持参もあり、さらにてんやわんやの状態。荷物はコンパクトにし、両手は自由に使えた方が便利だと学んだ。

全員が保安検査場を通過し、出発までフリータイム。ほっとしたのも束の間、ここでも一騒動。財布やパスポートを置いたまま席を離れる生徒、スマホに夢中で荷物に意識がない生徒の姿が見られた。防犯上、アメリカでの生活が心配になり、添乗員さんから「パスポート、航空券は肌身離さない」「荷物は体に触れておく」「友達に荷物を頼んで離れない。仕方なくするなら、頼まれた人は全力で荷物を守る」などのお話をいただいた。



羽田空港の国際線ターミナルでは、多くの外国人の方が行き交い、みんな興奮気味。思い出を記録に残すべくスマホで写真を撮る。思いあまって出国手続きのエリアでもパチリ。すぐさま警備の方がやってきて「撮影は禁止!」と叱られてしまった…

アメリカに到着する前から、体調管理・荷物管理・貴重品管理・危機管理の大切さを学ぶことが出来た。派遣事業への参加という挑戦をしたからこそ得られた素晴らしい学び。旅は、学びの宝石箱だ!



<機内・USAに到着 ～何もかもが挑戦！～>

危機管理の意識を高め、気持ちも引き締まったところで、いよいよ飛行機に搭乗。13時間の長旅に備えて、枕やブランケットなど身の回りを整えた。後ろの席からは「chicken」「fish」と機内食の注文を練習する声も聞こえてくる。自分たちで食べ物や飲み物の注文を無事に済ませ、お腹を満たす。その後は、映画鑑賞する生徒、何かを食べ続ける生徒、寝続ける生徒とそれぞれの過ごし方で長いフライトを乗り切った。



海外の航空会社の機内は非常に寒く、冬用のジャンパーやダウンジャケットを着ながら眠る必要があった。旅を充実したものにするためには、何よりも健康が一番大切。移動中も体調管理を怠らないようみんなで気をつけた。



待ちに待ったワシントンDCに到着！と安心したのも束の間、税関申請書の記入がペン書きされておらず、急いで書き直す。また、乗り物酔いでトイレに駆け込む。慌ただしい状況ではあったが、なんとか入国審査へ続く長い列へ。



審査に向かう列に並ぶ人達をみると、みんな髪や目の色、背の高さ、服装が異なっている。私たち以外に日本人はほとんど見受けられない。英語の表示や広告を見回す生徒の姿もあり、アメリカに来た実感が少しずつ湧いてきたようだ。入国審査は一人ずつ行われる。それぞれが管理官にパスポート・指紋・顔を登録してもらわねばならない。心細い状況ではあったが、全員無事に審査を終え、アメリカの地を踏むこととなった。

空港から外に出ると安堵感と開放感からか、「空が青くて広い」「道が広くない」「海外ドラマで見るパトカーだ」など、日本との違いに興味津々。疲れも吹き飛んだ様子だった。その後、元気にホテルへと直行した。



ホテルのロビーでは、「物のサイズの違い」を研修テーマに設定した生徒が、日本から持参したメジャーでソファなどを計測。研究熱心（実際、帰国報告会での発表内容も素晴らしかった）。身支度を済ませディナーへ。飲み物やステーキの焼き加減を英語で注文する。運ばれた飲み物や料理が誰の物かを英語で答える。料理を運んでくれた従業員さんに英語でお礼を言う。足りないフォークを英語で注文する。何をするにも英語で自分から主張しなければならない。ディナーだけでも、英会話や積極性を高めるいい挑戦となった。

フォークとナイフの使い方に戸惑いながら、大きなステーキと大量のマッシュポテト、巨大なコップに入ったジュースを堪能し、大満足の夕食が終了。部屋に帰る前に慣れないコインに戸惑いながら飲み物を購入した。試行錯誤しながらシャワーのお湯を出し、入浴。

入国審査・食事の注文・買い物・入浴と、あらゆることが挑戦の1日だったが、みんな無事に乗り切ることが出来た。



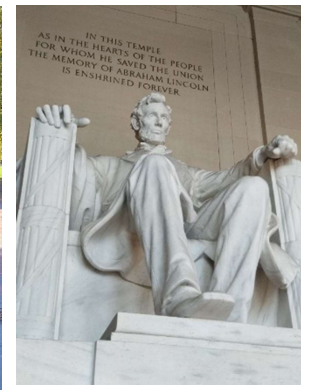
<10月27日 ～歴史の中に身を置く体験～>

ワシントンDCでの2日目の朝。体調を崩す生徒もおらず、バイキング形式の朝食を堪能。よく食べよく眠ることが健康の秘訣。長時間のフライトの疲れも見られず、生徒のタフさに感心させられた。

今回の生徒たちの素晴らしい点の一つは、時間に正確であることだ。集合時間や食事、出発時間に遅れることが一度も無かった。時間を守るのは当たり前のことだが、当たり前ができることこそ信頼を得る近道である。そんな生徒たちの素晴らしい行いのお陰か、研修中は晴天で暖かな天気が続いた。

この日の午前は、ワシントンDC周辺を観光。ナショナル・モールでは、リンカーンの「of the people by the people for the people」が刻まれている石版、キング牧師が演説した場所、南北戦争のモニュメント、国会議事堂などを見学。アメリカ合衆国大統領が就任式で演説を行う場所での記念撮影もできた。

さらにホワイトハウスを見学し、周辺のお店や露店でショッピング。その後、アーリントン国立墓地に向かい、ジョン・F・ケネディ大統領のお墓や無名戦士を守る衛兵を見学した。荘厳な雰囲気を感じ取ったのか、生徒も真剣な表情であった。教科書に載っているような歴史的な場所を訪れるという貴重な経験ができ、生徒たちの社会科の成績も上がることだろう。



<ノックスビル市へ ～熱烈歓迎に感謝～>

ワシントンDC周辺の観光の後はいよいよノックスビル市へ向かう。空港の保安検査場では、靴を脱いでの検査や全身をスキャンする物々しい装置でのチェックを受け、国際線のときよりも厳重な対応だった。全員無事に通過し、2時間程度のフライトで到着。

荷物を受け取り出口に向かうスロープを進むと、そこには横断幕を持って生徒の到着を待っているノックスビル市のみなさんがいた。長年、姉妹都市の交流に貢献してくださったテネシー大学名誉教授の故Jポール・ワトキンスさんの奥様のスージーさんや、ホストファミリーの決定など多くの事務手続きを担当してくれたエイミー・ブリッジズさんの姿もあった。温かなお迎えに、ノックスビル市での生活に期待が膨らむ。明日からのホームステイに備え、疲れをとるためにも早々に眠りにつく生徒たちであった。



<10月28日 ～ホストファミリーとドキドキのご対面～>

今日からホームステイがはじまる。ホストファミリーと交流を深めるために書道、卓球、ゲーム、ダンス、知育お菓子などの準備をしてきた。しかし、うまくいくか、どんな生活が待っているか不安と緊張と期待が入り混じる。



ホテルからホストファミリーが待つ動物園に向かう。移動中のバスは、みんな言葉少なく、張り詰めた雰囲気になっていた。

しかし、そんな雰囲気も動物園の入り口のホストファミリーを見て一気に吹き飛んだ。各家庭が手作りのウェルカムボードを持ち、生徒を迎えてくれたのだ。日本語で自分の名前が書かれているボードを見て、生徒たちは



満面の笑みを浮かべていた。さらに、バスを降りるやいなや、みんな駆け寄り握手やハグの嵐。

日本にいるときからメールで交流してきたこともあり、初対面にしてはスムーズにホストファミリーと接することが出来ていた。全員で記念撮影をした後、各家庭で動物園を散策する。

順調な滑り出しだったとは言え、そこは初めて会ったもの同士。生徒とホストファミリーの間にはまだまだ「硬さ」「距離感」が感じられた。



余談ではあるが、動物園で幼児の背中にリーシュコードを付けている家族が見られた。現地の方に聞くと、この辺では日常的に子供の誘拐が発生するのだとか。活発に歩き回る子供には、安全を確保するためにリーシュコードを付けるのだそうだ。

さあ、これからアメリカの家庭にたった一人で入り生活する。「心細いだろうが頑張るんだぞ」と心の中で生徒たちを激励する引率者であった。



<10月29日 ～ポットラックパーティー・ホストファミリーに感謝～>



本日は、各ホストファミリーが自慢の手料理を持ち寄り、みんなで食事をするポットラックパーティーが開催される。夕方、湖畔の会場に全員が集まることになっていた。

動物園で生徒と別れてから1日。慣れない異国の地でさぞ寂しい思いをしていただろうと考え、引率者は温かく生徒たちを迎える準備をしていたのだが…

到着した車からは、ホストファミリーと楽しそうに談笑しながら会場に向かう生徒の姿があった。手料理や飲み物を運び、お手伝いをする生徒、ホスト学生とじゃれ合う生徒。まるで本当の家族のように溶け込んでいるのではないか。中には、引率の存在に気づかず前を素通りしていく生徒まで…。

ホームステイの様子を聞くと「楽しい!」「どこどこに連れて行ってもらった!」など声が弾んでいる。互いの家庭での出来事を交流し合う場面も見られた。

生徒の環境にすぐに適応するたくましさ・柔軟性に驚きとうれしさを感じた。それとともに、頼られることがなくなり、少しだけ寂しさを感じる引率者であった。

ホストファミリーは希望者のうち、受け入れる生徒と同年代の子供を持つ家庭の中から選ばれる。ホームステイ中の生活費支援はなく、完全なボランティアである。生徒が快適に過ごせるよう、家族全員で日本語の勉強をするなど、どの家庭も環境づくりに一生懸命に取り組んでくれていた。

料理を堪能していると、いつの間にかバレーボール大会がはじまった。はじめは男女対抗バレーボール大会。その後は、日米対抗バレーボール大会へ。結果は残念ながら、日本が大敗を喫したようだ。円陣をつくったり、頭にボールが当たったり、楽しそうな姿に観戦中のホストファミリーからも大きな笑い声があがっていた。みんなが笑顔の素晴らしいひと時だった。



<10月30日 ～歓迎セレモニーで練習の成果を～>

この日は、アメリカの中学校生活を視察するために、ノックスビル市のシダーブラフ中学校を訪問した。歓迎セレモニーが行われる体育館に移動すると、そこには数百名の生徒が集まっており、和太鼓、オーケストラ、コーラスを披露してくれた。



次はいよいよ我らの出番。大勢の生徒の前で一人ずつ自己紹介。メモを見ながらのスピーチは少々残念だったが、ALTの先生のアドバイスをしっかりと生かすことができた。話をする横には、日本で書いてきた書道の作品を披露し、花を添えた。



そして、最も練習に力を入れてきた出し物を披露する時間となった。最初は、日本の伝統的な体操である「ラジオ体操」。英語の説明に合わせてホストスチューデントと共に体を動かす。みんな一緒に「背伸びの運動」などを行う何ともユニークな時間が流れた。



2番目は「よさこい」。動きを合わせるために一生懸命に稽古した甲斐があり、会場からは大きな拍手が起こった。はっぴなどを利用し、衣装をそろえた方がより効果的だったかもしれないが、持てる力はすべて出し切ることができた。



最後は会場にいる全員で紙飛行機づくり。実物投影機を使いながら、英語で折り方を説明するも難しいようで、座席をまわりながらみんなで折り方を教えた。その後、カウントダウンに合わせて一斉に紙飛行機を飛ばし合った。会場は大盛り上がり。大興奮状態。落ちた飛行機を拾いながら何度も飛ばす姿もあった。



名誉市民に選ばれた生徒たちは、その後、シダーブラフ中学校の授業を受けホームステイ先に帰宅。

大勢の観客の前での自己紹介、パフォーマンス、一人で授業へ参加。生徒のたくましさに感心させられた1日だった。



<10月31日 ～ハロウィンも警察の訪問も思い出～>

この日、引率者はアメリカの教育について研修するため、ノックスビル市の高校などを視察に訪れた。どの学校の生徒もハロウィンということで、思い思いのコスチュームをまといながら授業を受けていた。

ホストファミリーと生徒たちは学校が休みとなっており、ノックスビル市の街を観光したようである。ノックスビル市のシンボルタワーであるサンスフィア（1982年にノックスビル市で開催された国際万博のときに建設）の周辺や市内のメインストリートでホストファミリーと一緒にいる生徒の姿が見られた。

明日は、帰国の途に就く。観光する生徒を見て残り僅かな時間を目いっぱい楽しみ、良い思い出をたくさんつくって欲しいと思った。しかし、後で聞いた話では、この日の深夜、突然警察官がやって来て、家族全員を起こした家があったそうだ。近所で子供が行方不明になったため、情報を集めているとのことだったらしい。真夜中にパトカーに乗った警察官が訪問するという怖い思い出をつくった生徒もいたようだ。



<11月1日 ～お別れの日～>

とうとう別れの日がやって来た。早朝、ホストファミリーに送ってもらい、空港に集まった生徒たちの表情はとても悲しそうであった。預け入れ荷物の手続きを終えて、出発までのわずかな時間も片時も離れずに話をするホストファミリーと生徒たち。抱えきれないほどのお土産をもらっている生徒の姿もあった。すすり泣く声があちこちから聞こえてきた。

今回の研修が充実し、素晴らしいものであったということが、この別れの場面からも窺えた。文化の違いによる不安や戸惑い・未知の世界への好奇心や興味、そして国や文化、人種が違ってても大切なこと。8日間だったが生徒にとって忘れられない貴重な時間となった。

この後、無事に帰国した・・・と言いたいところだが、カムチャツカ半島での火山噴火の影響で飛行ルートが変更となり、成田空港から新千歳空港への乗り継ぎ便に間に合わなくなった。羽田での1泊追加というおまけ付きとなったが無事、室蘭に到着することができた。夜遅い中にも関わらず、迎えに来てくれた家族や職員の方々、校長先生に逢えてホッとした表情を見せる生徒たちであった。



<研修の成果1 ～生きる力の育成～>

学校などの教育活動は、児童生徒に「生きる力（自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動する力と言い換えられる）」を育むことを目指して行われる。今回のノックスビル派遣事業は、この「生きる力」を育むための絶好の機会であった。

参加した生徒の多くは、本研修が初めての海外旅行であり、ホームステイももちろん初めてであった。したがって、「防犯のために荷物や貴重品を管理すること」「物々しい雰囲気の入国審査を受けること」「旅程をこなすために、自分で体調を整えること」など、アメリカへ行くまでに生徒にとって多くの困難が存在した。

アメリカの生活でも「何がしたいかを絶えず問われること」「自分の意思を慣れない言葉で伝えること」「外国で他人の家庭にたった一人で宿泊すること」「英語の行われる授業に一人で参加すること」など、あらゆることが挑戦の連続であった。シャワーで温かいお湯を出すことすら試行錯誤が必要だった。

たった8日間であったが、このような環境は生徒たちをたくましく成長させた。失敗を恐れず、他人の目を気にせず、自分を表現することを楽しむようになった。相手を尊重し、相手の言葉に耳を傾けるようになった。このような成長・変化は、間近で見ていて感動を感じるほどであった。困難と挑戦の中での生活は、生徒の「生きる力」を大いに育んだ。また、「短期間でも志と環境が整えば人は成長できること」「教育の素晴らしさと可能性」を実感することができた。

<研修の成果2 ～自己肯定感について～>

日本の児童生徒の課題として「自己肯定感（自分を肯定的に捉える感覚）の低さ」が挙げられる。本市の児童生徒の「自己肯定感」も低い傾向にあり、改善が求められている。自己肯定感を向上させるには、「自分のことを主体的に決めて実行すること」「ありのままの自分を受け入れること」「まわりの人から受け入れられること」が大切だと考えられている。

本研修で訪れたアメリカは、絶えず「何がしたいか」を問われ、自ら主張することが当たり前の文化である。また、多様なバックグラウンドの人々がいるため、多用性を認めあう土壌がある。このような異なる文化・環境に身を置き、生活した経験は生徒の自己肯定感を大きく向上させたと考えられる。また、研修で一生懸命に準備したパフォーマンスへの賞賛、別れを惜しんで泣いてくれる仲間の存在なども、自己肯定感を高めることにつながったと思われる。



<今後の課題 ～さらに充実した研修を行うために～>

・本研修の活用について

前項に記載した通り、本研修は教育効果が非常に高い。この素晴らしい活動の効果を一過性のものや参加した生徒のものにとどめるのではなく、継続的なものや研修に参加していない生徒へと広げることが望ましい。例えば、理科の植物分野の学習において、室蘭市とノックスビル市の植生について互いに調べ、動画にて交流する。総合的な学習の時間のふるさと学習において、室蘭市とノックスビル市の特徴を互いに調べ、交流する。その際、本研修に参加した生徒に実際にどんな町だったかを話してもらうことも可能である。このような取組を行うことで、本研修の教育効果が広がっていくと思われる。

・パソコンの活用について

今年度は、生徒に一人1台貸し出されているパソコンで市のネットワークを利用し、課題の提出や出し物の準備などに取り組んだ。これは、所属する中学校が異なる生徒同士や生徒と担当者（引率者や市職員）の連絡手段として大変役立った。しかし、初めての試みであったため、五月雨式の利用となった面があった。そのため、今後はいつどのような内容でパソコンを利用するか計画し、事前に周知して活用することが望まれる。

・事後研修の流れについて

帰国後には、帰国報告会の資料作りや、報告書の作成、報道機関向けの資料作成など課題がたくさんある。今回は、事前研修に重きを置いて活動し、事後研修に関するアナウンスを生徒に示すのが遅れたように感じる。そのため、今後は「いつまでに」「何を」「どのくらい」作成するかについて事前に明示することが求められる。

<最後に>

ノックスビル市の庁舎を訪問した際、ノックスビル市と姉妹都市の関係にある各都市からのお土産が飾られていた。しかし、どの都市とも交流は自然に消滅しており、本研修のような活動は室蘭市との間だけであるとのことであった。また、ノックスビル市のみなさんの親日的な気持ちは、現地の日系企業で働く日本人駐在員の方々が信頼を積み上げてくれたおかげでもあると現地のスタッフの方から教わった。

つまり、今回のような素晴らしい研修ができるのも、派遣事業に携わり、友好関係を築いてきた方々の努力があってこそ。これまで友好関係を築き、継続してくださったみなさまに心から感謝申し上げます。

今回の派遣された9名の生徒たちも、日本人の良さを十分に伝え、姉妹都市の歴史を未来につないでくれたと思う。改めて9名の素晴らしい仲間たちに感謝します。ありがとう。



ノックスビル市派遣報告書 ～日本とアメリカの教育の比較～

室蘭市立港北中学校教諭 鈴木克治

1 はじめに

(1) 研修テーマについて

ノックスビル市派遣事業へ参加するにあたり、「日本とアメリカの理科教育の比較」を研修テーマに設定した。実際に現地での視察を行うと、義務教育の年限・入試制度・教室環境・生徒指導など、さまざまな教育制度の違いがあり、この違いが理科教育の在り方にも影響を与えていることが分かった。また、この教育制度の違い一つ一つが興味深い内容であったことから、研修テーマを「日本とアメリカの教育の比較」に変更し、本報告書を作成した。

(2) 内容について

本報告書の内容は、主に「シダーブラフ中学校」「L&N STEM Academy」「Bearden High School」などの視察の際の学校・生徒の様子や伺った話を中心にまとめたものである。したがって内容に関しては、自治体（州など）による違いや視察した学校独自の内容がある。

2 学校の制度に関する事項

(1) 義務教育の年限

- ・12年間を義務教育とし、小学校に当たるエレメンタリースクールが5年間、中学校に当たるミドルスクールが3年間、高等学校に当たるハイスクールが4年間である。

(2) 入試の制度

- ・地域の公立高校へ進学する場合は、入学試験は行われない。
- ・大学へ進学する場合は、高校2～4年次に共通のテスト（年に数回実施、複数回受験が可能）を受け、このテストの点数と推薦状、課外活動の内容などにより選抜される。

(3) 学校制度について感じたこと

高校までが義務教育で高校入試がないことが、日本とアメリカの教科指導に大きな違いを生じさせる原因の一つになっていると考える。日本では高校入試や入試の資料となる学力テストの範囲に合わせた単元計画、授業進度、内容にしなければならず、教科の進め方に関して教科担当者の自由度は限られている。一方、アメリカでは生徒の理解にあわせ、授業内容や進度を調整することが出来る。視察において、「理解が高い生徒が多いので、高校の授業を先取りして教えている」と話す先生がいた。

3 教職員の業務に関する事項

(1) 教員の業務

- ・担任は、朝や帰りなどにスケジュールを伝えるのみである。清掃指導や給食指導、進路指導、教育相談（家庭での悩みを聞くなど）は行わない。
- ・教員は自分の教室を持っており、生徒が授業を受けるために教室を移動する。
- ・教員は勤務時間が終了すれば直ちに帰宅する。夏などの長期休業中は、自身の指導力を向上させるために研修を受ける。
- ・部活動は、希望する教員のみがコーチとして指導にあたる。

(2) 教員以外の職員

- ・進路指導は専門の職員が担当する。生徒に進路（進学や就職）についての相談および情報提供を行う。
- ・教育相談は専門の職員が担当する。スクールカウンセラーが常駐しており、家族の問題などについてカウンセ

セリングする。

- ・図書館の利用方法や調べものは、専門の職員が担当する。図書室には図書館司書が常駐しており、生徒が必要とする図書の紹介、調べ学習の進め方などを指導する。
- ・英語を母国語としない生徒への英語の教育は、一般の生徒が社会科を受けている時間に別室で行われる。生徒の母国語を話せる教員が英語を教える。この英語の授業で一定以上の力が証明された場合に、一般の生徒と同様のカリキュラムに参加することができる。

(3) 教職員の業務について感じたこと

生徒をサポートするスタッフの人数が多く、それぞれが専門的なスキルを持っていることに驚いた。生徒指導などで課題が生じた場合は、チームとして互いに意見を出し合い、解決策を考えるなど、組織的に教育活動が進められている印象を受けた。また、スタッフは常駐しているため、必要に応じていつでも生徒をサポートすることができる。日本では教員、特に担任が教科指導も生徒指導も部活動もこなす場合が多いが、アメリカでは教員は教科の指導をする専門家という位置づけである。

4 生徒指導に関する事項

(1) いじめへの対応

- ・中学校ではいじめを受けた、または目撃した場合、教職員に申し出るよう日頃から指導されている。
- ・中学校の廊下にはいじめの基準が掲示され、日常的に生徒が確認できるようになっている。
- ・いじめかどうかの判断は、被害者と加害者のパワーバランスを見る。互いに対等な立場で行われた行為はいじめとはならない。一方が弱い立場である状況で行われた行為がいじめとなる。
- ・いじめの発覚後、被害者と加害者の保護者を学校に呼び、校長が聞き取りを行う。学校長は20日以内に調査内容を教育委員会に提出しなければならない。

(2) 問題行動を起こす生徒への対応

- ・問題行動はいくつかの段階に区分されており、それぞれの段階に応じた対応を行う。もっとも重大な問題行動の一つは、銃などを学校に持ち込むことである。
- ・授業で問題行動を起こす生徒がいた場合は、管理職、教員、スクールカウンセラー等で情報を共有し、あらかじめ決められた基準を参考に、校長の判断の下で対応を決定する。
- ・対応の例としては、通常の一斉授業ではなく対象生徒ひとりで（教員は付く）別室で勉強させる。期間は、問題行動の程度によって変わる。
- ・行動が改善されない場合は、別の学校に通わせる。その学校は、通常の学校よりも規律が厳しい。一定の期間が終了した場合に、もとの学校に戻される。
- ・問題行動を起こす生徒への対応は、罰として行うのではなく、生徒の教育のために実施される。

(3) ルールなど

- ・授業中は校則では飲食を禁止しているが、視察の際に授業で飲食している生徒は多数見られた。担当教師によって対応が分かれているようである。
- ・シダーブラフ中学校のホームページには、服装に関する校則（ドレスコード）が明記されており、一定のルールが周知されている。
- ・広くて安全な廊下は、自由に歩きまわり騒がしくしてもよい。狭くて、まわりに大切な部屋が隣接している廊下は、私語をせず整列して通過しなければならない。昼食のときにランチルームへ向かう生徒達に会ったが、一列に並んで私語をせず移動していた。

(3) 生徒指導について感じたこと

生徒指導について、手順が明確でわかりやすい印象を受けた。「このような場合は、このような対応を行う」といった原則が予め周知されており、それに則って話し合いが進められる。さらに、生徒の課題解決に

向けた対応の検討・実施も、教科担当やスクールカウンセラー、管理職など生徒に関わるスタッフがチームとして行う。日本でも教職員でチームとして課題解決に臨むが、担任制度を採用しているため、あらゆる面において担任中心で進められることが多いと思われる。

アメリカの学校では授業や休み時間に自由にふるまう印象があったが、廊下の歩き方や授業の受け方、話の聞き方などの公共のマナーに関しては、規律を重んじた指導が行われていた。

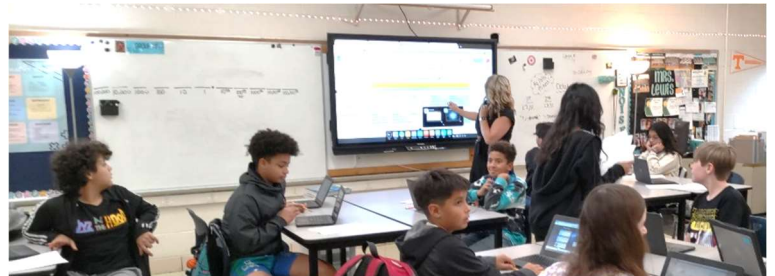
5 教科指導に関する事項

(1) 授業について

- ・単元や教科、教員によって授業形態はさまざまである。
- ・どの授業においても板書する場面が非常に少ない。
- ・教員が口頭での説明に終始する授業もある。
- ・教員が説明する代わりに映像資料を見せる授業もある。
- ・中学校では、生徒の理解に合わせて高校の教科書を使って授業を進めることもある。
- ・生徒は一人に一台、ノート型パソコンが与えられており、必要に応じて使用していた。
- ・教科書やワークは紙のものを使用しており、デジタル教科書を使用している授業は見受けられなかった。

(2) 教室の環境

- ・すべての教室には黒板はなく、前方の壁の中央にモニタが備え付けてあった。そのモニタの横にホワイトボードが備え付けてあった。
- ・座席配置は、それぞれの教室で異なっていた。
- ・教室の広さは、日本の特別教室（理科室など）程度であり、授業を受ける生徒の数は10～20名程度であった。したがって空間に余裕があり、交流する場面などでは生徒が動きまわりやすそうであった。



シダーブラフ中学校の教室。前方中央にモニタとホワイトボード

(3) 理科教育について

<中学校>

- ・中学校における1週間の授業の流れは、「1時間目：レクチャー（講義形式）、2～3時間目：実験・解説、4時間目：テスト」である。
- ・中学校で1週間に行う実験は1～2回程度である。
- ・中学校では、生徒の理解に合わせて高校の教科書を使って授業を進めるときもある。
- ・実技テストはあまり実施していない。学年のはじめに実験の安全に関するレポートテストを行っている。

<高等学校>

- ・小学校や中学校段階では、用語の意味を覚えさせるなど、基礎学力を身に付けさせることが多い。高校では小・中学校で身に付けた用語を使用し、現象を説明する力を身に付けさせることが多い。
- ・「L&N STEM Academy」では、入学を希望する生徒の中から抽選（居住地で人数の割合は決まっている）で入学者を決めている。進学実績や成績に関して、非常に良好な結果を残している。
- ・「L&N STEM Academy」では、APテスト（大学レベルの内容のテスト）を使って授業・テストを実施している。



L&N STEM Academy の生物の授業の様

- ・「L&N STEM Academy」においても、パフォーマンステストの評価基準をつくることは大変である。
- ・「L&N STEM Academy」の授業視察では、レクチャー（講義形式）はあまり見られず、生徒を屋外に連れ出しての実験・観察（生物分野の「適者生存と個体数」の授業）や調べ学習の発表などが実施されていた。
- ・高校では、自分の理解度に合わせた授業を受けることができる場合がある。高度な内容の授業を受け、習得した場合には、大学の授業の単位として認められるものもある。

(4) 教科指導について感じたこと

アメリカの教育は、詰め込み教育のような授業は行わず、話し合い・調べ学習・レポートの作成・実験などを盛んに行っている印象を持っていた。そのため、どのように基礎・基本の定着をはかっているか興味があった。視察した結果、小学校や中学校段階では、用語や定義などの基礎・基本は、日本と同様にレクチャー（講義形式）を行い、反復して覚えさせるということであった。

授業の形態はさまざまで、ICTを活用する授業、口頭での説明に終始する授業、話し合いを行う授業、調べ学習をさせる授業など、日本と同様であった。

中学校の理科の授業では、週1～2回程度の頻度で実験を行うということであり、日本と比較してもそれほど多い回数ではなかった。

STEM教育を実施している高校では、実験や観察・発表などが非常に活発に行われている印象を受けた。テストではAPテストを活用していた。このAPテストは各教科における自分の力を客観的に測るもので、英語における英検のようなものだ。大学レベルの内容で、非常に高度な思考力を必要とするテストであった。アメリカの理数科教育が充実していることを感じる事が出来た。

6 危機管理に関する事項

(1) 避難訓練について対策

- ・火災に対応する避難訓練は、毎月1回実施する。生徒に実施日のみを知らせて行う。
- ・不審者に対応する避難訓練は、毎月1回実施されている。生徒に実施日のみを知らせて行う。
- ・実施日を知らせずに行う避難訓練も行うことがある。

(2) 校内の危機管理の状況

- ・玄関は施錠されており、無断で入ることができない状況になっている。
- ・視察した高校では、校内に入る前に身分証明（免許証、パスポートなど）を済ませ、入校許可のシールを胸に張ることを義務付けられている。
- ・シダーブラフ中学校には、警察官とセキュリティー担当職員が各1名、校内を巡回している。

(3) 危機管理について感じたこと

我々がノックスビル市を訪れる半年ほど前に、ノックスビル市と同じテネシー州のナッシュビル市で、銃の乱射事件が発生し、児童3名と教職員3名が犠牲となった。また、ノックスビル市の動物園では幼い子供の誘拐が頻発しているため、子供にリーシュコードを付けて園内を散策している家族が見られた。アメリカの学校では危険は身近なものであるため、玄関の施錠、警察官による校内パトロール、来校者の身分証明、有事の際に向けた訓練など、緊張感を持って取り組んでいることが分かった。

7 部活動に関する事項

(1) 部活動の指導

- ・部活動は、専門のコーチか希望する教員がコーチとして指導する。
- ・生徒は、複数の部活動に所属することが可能である。学年や季節によって部活動を変更することもできる。

(2) ボランティア活動

- ・ボランティア活動が盛んで、生徒は小学校のころから取り組みに参加する。自分たちで作った菓子を売り、

その収益を慈善団体への寄付や学校設備の充実に充てる。

- ・ボランティア活動で菓子の販売がもっとも多かった生徒を表彰するなどの取り組みが行われる。

(3) 部活動について感じたこと

部活動の指導は地域のコーチが行う。地域の方々は自分の子供が所属していなくても、地域のチームの大会があれば応援に行く。ボランティア活動で生徒が作った商品を地域の方が購入して生徒の社会貢献活動に協力する。アメリカでは部活動・ボランティア活動は、地域全体で生徒を育てる取り組みであるということを理解した。

8 研修を通して

インターネットの進化やソーシャルネットワークの普及、社会のグローバル化により私たちの価値観は多様化している。このような変化に伴い、日本の教育も違いを認め合い個に応じたきめ細やかな指導をすることが求められている。そこで、日本の教育の素晴らしい面は維持しつつも、担任を中心とする教師のみによる教育から、常駐のスクールカウンセラー、地域の部活動指導者、外部講師など、多様な専門家が参画する組織的な教育へと学校教育を変革し、より適切に生徒の成長をサポートする体制と健全な教職員の労働環境整備を速やかに進めるべきである。

ノックスビル市中学生派遣事業報告書（引率）

引率 室蘭市教育委員会 福田 香

○1日目

朝、市役所本庁舎に集合したとき、派遣生徒は親御さんに連れられ、少し不安げな顔つきでした。見送りに各校の校長先生や、事務局の職員が来て下さり、この事業が多くの方に支えられていることを再認識しました。リーダーの土山くんが、リーダーらしくはきはきと挨拶し、ノックスビル市へ向けて出発しました。

新千歳空港へ向かうバスの中で、添乗員の岡田さんより国際線に乗る際の注意事項が伝えられ、みんな真剣な表情で聞き入っていました。驚いたのは、みんなの手荷物の大きさです。お菓子やホストファミリーと遊ぶためのおもちゃなど、バックいっぱい荷物詰め込まれていて驚きました。最終的にはみんな荷物を無くさず帰ってこられて、良かったです。

空港では、手荷物を椅子に置いたまま離れてしまう生徒もあり、海外に行ったらすぐ盗まれてしまうよ、と岡田さんからアドバイスを受けながら羽田空港へ出発しました。

国際線の中では、お菓子や機内食を食べ、映画を見たりなどみんなリラックスして過ごしていました。飲み物のサービスを飛ばされる、というハプニングのあった生徒もいましたが、自分でキャビンアテンダントさんに声をかけ、無事に飲み物をもらうことができおり、しっかりしていると感じました。

12時間の長いフライトを終え、ようやくワシントンD.C.へ到着後、そのままホテルへ向かい、夕食をとりました。夕食の時には、各自英語で飲み物の注文をすることに挑戦しました。みんな少し緊張しながらも、堂々としていて、頼もしく感じました。



○2日目

ワシントンD.C.では現地ガイドのマサコさんが案内をしてくれました。バスの中では、「文法にこだわらず、単語だけでも良いからまずは話すことが大事」と英語でコミュニケーションをとる際のアドバイスをしてくださり、みんな真剣に聞き入っていました。

市内見学ではリンカーン記念堂やアーリントン墓地を見学し、アメリカの歴史を目で見て学ぶことができ、とても有意義でした。派遣生徒もマサコさんの説明によく耳を傾けており、前日の疲れを感じさせないくらい元気でした。

昼食は、市内のショッピングモールにあるフードコートで、各自英語での注文に挑戦しました。飲み物だけ頼んだつもりが、バーガーセットが出てきた生徒もいましたが、みんな楽しそうに過ごしていました。

市内見学を終え、いよいよノックスビル市に向けて出発しました。ノックスビル市の空港に到着すると、早速現地のムロランクラブの方々と、ノックスビル市の職員の方が出迎えてくださり、温かく歓迎してくれました。開港150年・市制施行100年の記念Tシャツを着てくれている方もいて、室蘭市を大事にしてくれているように感じ、



嬉しく思いました。

翌日はいよいよホストファミリーと対面する日であり、みんな少し緊張している様子でしたが、ホテルの夕食をしっかりと食べ、翌日に備えていました。

○3日目

ホストファミリーと対面するため、市内の動物園へ向かいました。動物園の入口に到着すると、ホストファミリーがウェルカムボードを持って笑顔で出迎えてくれました。その様子を見て、みんなも笑顔になり少し緊張がほぐれたようでした。動物園内の広場で簡単な説明を受け、みんなで記念撮影を行った後、それぞれのホストファミリーのもとへ解散となりました。早速ホストスチューデントと動物園のアトラクションに乗っている生徒もあり、仲良くなるのが早いことに驚きました。



この日は動物園で派遣生徒とお別れし、別行動になりました。引率はシダーブラフ中学校の先生と、現地の日本人ボランティアの方と一緒にテネシー川沿いのレストランで昼食をとった後、市内のメリーヴィル大学で行われていたアメリカンフットボールの試合を見学させていただきました。アメフトの試合を生で見るのは初めてだったので、プレイヤー同士がぶつかり合う迫力に圧倒されました。観覧席がほぼ満員となっており、現地の方々のホームチームへの愛着を感じました。

夕食まで時間があつたので、カフェでシダーブラフ中学校のパーティ先生に現地の教育についてお話を伺いました。アメリカの学校は高校までが義務教育のため、日本に比べて教育課程に時間的余裕があるように感じました。義務教育を終えるまで時間があるので、将来のキャリアについて考える時間を長くとれるところが、良い点だと思いました。

パーティ先生は土曜日にも関わらず、半日市内を車で案内してくださり夕食もご一緒してくれました。ご家族が過去に室蘭市を訪れたことがあるということもあり、室蘭市に対して良い印象を持ってきていました。良い印象を持ってきているのは、過去にこの派遣事業に参加した方々が、良い関係を築いてくれたおかげでもあると思います。今回の派遣事業を通して、自分も今後その一人になれたらと思いました。

○4日目

この日は、シダーブラフ中学校のスクールカウンセラーであるエイミー先生と、長らく室蘭市との関係維持にご尽力いただいていた、故ポール・ワトキンスさんの奥様であるスージーさんと一緒に、ノックスビル市の隣町であるオークリッジ市を見学しました。オークリッジ市は戦時中に原爆を製造していた秘密基地のあった土地で、現在はスーパーコンピューターの開発など科学技術の発展に力を入れている場所です。19



92年に市の50周年を記念して、平和の象徴となるモニュメントを作成しようという事業が発足し、日本の京都で鑄造された鐘楼が飾られることとなりました。その鐘楼を見学させてもらい、鐘を鳴らしてみたところ、とても美しい音で感動しました。

その後、ブラッシーマウンテン州立刑務所の跡地や、オークリッジ科学博物館を見学させていただきました。ブラッシーマウンテン州立刑務所では、囚人を石炭採掘のため働かせてきたこと分かる資料展示や、実

際に使われていた監獄の中に入ることができ、とても迫力がありました。オークリッジ科学博物館では、原爆製造の歴史を紹介するパネルや当時の写真など貴重な資料を見ることができました。



夕方に、ポットラックパーティーという参加者が料理を持ち寄り、みんなで食べるイベントに参加しました。派遣生徒とそのホストファミリーが参加しており、まだ1日しか経過していないのに、手をつないで歩いてくる様子を見て、良い関係を築けているように感じ安心しました。昨日とは違い、みんなリラックスした表情でバレーボールをしていて、1日1日成長している様子を近くで見ることができ、嬉しく思いました。

○5日目

この日はシダーブラフ中学校に訪問する日でした。到着して早々に、体育館で歓迎のセレモニーがあり、ブラスバンドの演奏を披露してもらいました。その後、派遣生徒が一人ずつ自己紹介を行いました。全員堂々として立派でした。笑顔で現地の生徒に手を振る生徒もおり、余裕を感じさせました。

自己紹介の後には、日本で練習してきた、ラジオ体操・よさこい・おりがみの実演を披露しましたが、3つとも大成功で大きな拍手と歓声に包まれました。特におりがみの実演は、折るのに苦戦していた現地生徒もいましたが、完成後にみんなで紙飛行機を飛ばした時には大歓声でした。日本の文化を上手に現地の生徒に伝えてくれたと思います。全体を通して、普段習い事や部活もある中、頑張っって練習してきたことが見て取れました。この経験が、今後の自信につながってくればと思います。



その後、校長先生から一人ずつノックスビル市の名誉市民証を授与していただき、学校内を見学してもらいました。この派遣事業は市職員の研修も兼ねているため、設定した研修テーマに沿って建物施設を見学してきました。日本と異なるところも多く、良いところは室蘭市の学校運営にも活かしていきたいと思いました。

学校を見学した後、ノックスビル市の庁舎へ向かい、キンキャノン市長にご挨拶させていただきました。ノックスビル市のシンボルであるサンスフィアとボルタの人形を手渡すと、とても気に入ってくださり嬉しくなりました。私は室蘭の夜景が好きなので、自分の名刺に描かれている室蘭の夜景を見せながら、ぜひ室蘭に来てみてほしいと話をしました。市長は室蘭に行くとしたら何月が良いか聞いてくださり、興味を持ってくれたように感じました。ノックスビル市の子供たちはどんな子に育ててほしいと思うか伺ったところ、地域的に移民の方が多いので、3年生までに識字率を100%にしたいと仰っており、日本との地域性の違いを感じました。

夜は、ムロランクラブの方々とレストランで食事をしました。ムロランクラブはノックスビル市民で室蘭のことを好きな方々の集まりなのですが、温かく迎えてくださりとても嬉しかったです。室蘭に来たことのある方も多く、室蘭のカレーラーメンが好きだと話してくれました。





ムロランクラブの方の他に、シダーブラフ中学校の校長先生と、校長先生の娘さんも来て下さったのですが、校長先生は以前、室蘭市の生徒をホストファミリーとして受け入れてくれたことがあったそうです。娘さんは、その室蘭市の派遣生徒のことを今でも覚えており、自分もぜひ室蘭に行きたいと言ってくれたので、とても嬉しかったです。

○6日目

この日は、ムロランクラブのカルメンさんが所属されている、動物を保護するアニマルセンターを見学しました。アメリカはボランティア活動が盛んであり、このアニマルセンターもボランティアで成り立っているという話を聞いて、日本でもこうしたボランティア活動が盛んになれば、解決できる課題が増えるのではないかと思います。

その後、理科の教育に特化した高校を見学させていただきました。テストは全て先生が作成しているわけではなく、行政機関から提供されているものもある、という話を伺い、先生方の事務効率化につながるのではないかと感じました。授業の様子も見学させていただきましたところ、ハロウィンの日だったので、仮装している生徒が多く見られました。日本のアニメのキャラクターになりきった生徒も多くいて、認知度の高さに驚きました。

高校を見学した後、ノックスビル市のシンボルマークであるサンスフィアというタワーや、ダウンタウンの街並みのほか、ムロランストリートという通りも見ることができました。ダウンタウンを歩いていると、偶然派遣生徒の米田さんと熊谷さんに会うことができました。ホストファミリーとハロウィンを楽しんでいるようで、安心しました。

午後にはバーデン高校を見学させていただきました。開港 150 年・市制施行 100 年の記念式典に参列していただいたハナ先生が勤務されている学校で、おみやげのユニクロとのコラボ T シャツを手渡すことができました。この高校には日本語を勉強している生徒もあり、室蘭に行ってみたいと言ってくれたのが嬉しかったです。



その後、日本人ボランティアのクミさんの家にお邪魔した後、テネシー大学のバスケットボールチームの試合を見学させていただきました。テネシー大学の体育館は、大きなプロジェクターが天井からつるされており、観客席の数も学校の体育館とは思えないほど多かったです。地元の方の多くがホームチームのファンになっており、試合のチケットが良く売れるそうで、大学の運営資金にもなっているとのことでした。バスケットボールだけではなく、アメリカンフットボールもホームチームのグッズがいたるところで販売されており、ウィンドブレーカーやパーカーを着ている方を多く見かけました。地元の方に愛着をもってもらうということは、学校を運営するうえで大切なことであって、大きな力になると感じました。シダーブラフ中学校では、施設整備を行う際に、生徒の両親や卒業生から寄付を募り、そのお金を活用することもあると伺い、日本との違いを感じました。こうしたことができるのは、学校に愛着を持ってもらっている証拠であると思いました。





○7日目

あっという間に帰国する日になってしまいました。派遣生徒達は、お別れの時間が近づいているため、到着した時点でさみしそうな表情をしていました。とうとうホストファミリーとお別れする時間になると、みんなハグをして別れを惜しんでいました。涙を見せる生徒やホストチューデントもあり、短い期間ではありましたが、良い関係性を築けたことが見て取れました。最後にみんなで記念撮影を行い、日本に向けて出発しました。

日本に着いたところ、噴火の影響で新千歳空港への乗り継ぎが間に合わず、羽田近くのホテルに追加で1泊することになりました。生徒達は早く自宅へ帰りたいと言っていたのですが、ホテルに着いた時には生徒同士で楽しそうに過ごしていました。

○8日目

午前中に羽田空港へ向かい、チェックインを行いました。時差の関係で寝不足の生徒もいましたが、無事に国内線に乗ることができ、新千歳空港へ到着しました。添乗員の岡田さんとはここでお別れとなりました。岡田さんはこの派遣事業に何度も参加していただいております、とても頼りにさせてもらいました。アメリカに行く前は、英語が通じるのか不安がありましたが、岡田さんが助けてくださって、充実した研修にすることができました。



室蘭市役所に到着すると保護者の方と校長先生、事務局職員が迎えてくれました。最後にリーダーの土山くんから挨拶をしてもらい、解散となりました。みんな疲れた表情でしたが、ご家族の方と無事に対面することができ安心している様子でした。

○最後に

無事に派遣生徒をご家族のもとへ帰すことができ、ほっとしました。生徒の成長を間近で見ることができて、光栄でしたし、自分の仕事のモチベーションに繋がりました。アメリカで見てきたこと、感じたことを、今後の業務に活かしていきたいと思います。そして、ノックスビル市に住んでいる方々がとても温かく迎えてくれたということを、室蘭の方々に伝えていきたいです。これからノックスビル市と室蘭市の関係を繋げていくには、ノックスビル市の魅力をより多くの方に知ってもらうことが大事だと思います。私もその魅力を伝える一人になりたいと思います。

最後に、

- ・ノックスビル市で温かく迎えて下さった市民の皆様
- ・一緒に行ってくれた派遣生徒のみんなと、生徒を預けていただいた保護者の皆様、引率の鈴木先生、添乗員の岡田さん
- ・本事業に参加するにあたり快く背中を押していただきました、教育部の皆様
- ・サポートをしてくださった実行委員会の皆様

派遣事業を支えてくださった皆様に感謝申し上げます。

日本とアメリカの施設整備の違いについて

引率 室蘭市教育委員会 福田 香

1. 研修テーマ

「日本とアメリカの施設整備の違いについて」

2. 机や椅子について

| | 日本 | アメリカ |
|-----|-----------|-------------|
| 材質 | 木材かプラスチック | 木材かプラスチック |
| 大きさ | 体格に応じた大きさ | 体格に応じた大きさ |
| 配置 | 黒板に向かって並列 | 4～6人のグループ配置 |

- ・材質や大きさは日本と同じように感じた。
- ・配置は日本と大きく異なり、ほとんどの教室でグループ配置となっていた。日本のように全員が正面を向いている形式の教室はほぼ無かった。
- ・グループ配置となっていることで、発言がしやすい雰囲気となっているように感じた。先生に指名された時以外にも、生徒同士で、先生からの質問に対する意見を交換する場面が多く見られた。



3. 防犯対策について

| | 日本 | アメリカ |
|--------|------------|----------------------|
| 来客対応人員 | 主に事務職員、事務員 | 受付に常駐する人員を配置 |
| 受付方法 | 名簿に名前を記載 | 身分証明書を提示し、パソコンに情報を記録 |
| 避難訓練 | 年2回程度 | 月1回 |

- ・アメリカの方がより危機意識が高いように感じた。
- ・受付専任の人員が確保されているところが大きく異なる点だと感じた。
- ・身分確認が徹底して行われており、安心感があった。
- ・高校では、金属探知機も整備されており、行事の際に使用されているとのことだった。



4. 一人一台端末について

| | 日本（室蘭市） | アメリカ |
|-------|----------------------------|-----------------|
| OS | Chrome | Chrome |
| 端末故障時 | 重過失もしくは故意の場合は弁償、それ以外は予備機対応 | 保護者が加入している保険で弁償 |
| 購入方法 | 一括購入 | 複数年かけて整備 |

- ・活用方法については、日本と同じように調べ学習や、宿題を出す際に活用されていた。大型提示装置に画面を映して指導する形も日本と同様であった。
- ・端末故障時の対応については、アメリカでは保護者に保険への加入を求めており、その保険で弁償してもらっている点が本市と異なる点であった。
- ・購入方法については、複数年かけて整備されており、費用の負担の平準化が図られていた。



5. その他

- ・黒板を使用している場面はほぼ見られなかった。大型提示装置を活用している教員がほとんどであり、ホワイトボードを使用している教員も多かった。
- ・教員の校務用PCも一人一台支給されていたが、生徒が使用している機種とは別のものであった。OSはMacやWindowsとばらばらで、統一はされていなかった。

6. まとめ

- ・建物全体としては日本の学校と大きな違いは無いが、防犯対策については日本と大きく異なり、参考になった。
- ・日本でも不審者が学校に侵入する事件が起きていることから、身分確認の徹底や、人員の配置等、アメリカの良いところを取り入れていくことを検討しても良いのではないかと感じた。
- ・本市で使用している端末が、令和7年度には使用から5年目を迎えることから、アメリカの複数年整備を参考に、更新を進められればと思う。
- ・端末故障時の対応について、本市では持ち帰り学習を開始してから故障頻度が高くなってきており、アメリカのように保険を活用することも選択肢の一つとして考えて良いのではないかと感じた。